

海洋が生む、アートとサイエンスの新境地

SIOME

東京藝術大学 × 香川大学 ART & SCIENCE

SIOMEは、東京藝術大学と香川大学が連携し、アートとサイエンスを基軸に、異なる流れの交差（潮目）で課題解決を「ともに考え、ともに実践」する取組の総称です。瀬戸内の自然と文化を未来へ繋ぐためアートとサイエンスの融合から新たな価値を生み出すことを目指しています。

研究者紹介 02

イノベーションデザイン研究所
特命助教

ま せ と も な り
間瀬 朋成

東京都中央区出身。東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修了。修士（芸術表現）。東京藝術大学美術学部助教を経て2025年より現職。専門は現代美術、近現代美術史、絵画論、平面論。

研究者紹介 01

農学部 兼 瀬戸内圏研究センター
助教

な か く に ま さ と し
中國 正寿

千葉県船橋市出身。創価大学大学院環境共生工学科博士後期課程修了。博士（工学）。博士研究員、特命助教を経て2026年より現職。専門は沿岸生物地球化学。沿岸海域における物質循環や栄養素（必須脂肪酸など）の研究に取り組む。

データを集めるための海に
「人との関わり」
という視点ができた

専門は「沿岸海洋生物地球科学」です。海の中で栄養がどのように循環し、それによって植物プランクトンがどう増減しているのかを観測しています。海というと魚に目が行きがちですが、実は魚だけを見ても海の豊かさはわかりません。魚を支える小魚、その小魚を支える動物プランクトン、さらにその餌となる植物プランクトン……というように食物連鎖のピラミッドがあり、その底辺にあたる「海の足腰」の部分を見続けています。

そんな中で出会ったのが、芸術と科学を横断する「SIOMEプロジェクト」の公募でした。最初に惹かれたのは、「誰もやっていない」という点です。研究者として、新しいことに挑戦したいという思いがありましたし、科学と芸術が交わることで、これまでにない何かが生まれる予感があり応募しました。

実際に関わり始めて、海を見る視点は大きく変わりましたね。以前の私は、海を「論文を書くための場所」として見ていました。どこで、どうサンプリングすれば、どんなデータが取れるか。そういう視点が中心だったんです。け

風景だった海に
生命の痕跡や循環を見た

現代美術家として作品制作の傍ら、美術批評や美術史の研究も行っています。以前は東京藝術大学で教鞭をとっていましたが、現在は、香川大学JPEAKS事業「SIOMEプロジェクト」を主な活動としながら、創造工学部で「造形基礎演習」も教えています。例えば、形や色の組み合わせによって「温かい」「冷たい」といった印象が生まれるように、デザインには必ずどう受け取られるかという解釈があります。そういった表現の根源を学生たちに伝えています。

香川へ移るきっかけになったのがその「SIOMEプロジェクト」です。科学者と芸術家が協働するというコンセプトに惹かれました。特に魅力的だったのが、瀬戸内海というフィールドの存在でした。瀬戸内海は、かつて工業化によって汚染されながらも、世界的に見ても珍しいほど環境改善を遂げた海です。その歴史を含め、とても特異な場所なんですよ。

このプロジェクトでは、科学者と芸術家と同じ船に乗って海へ出ます。そこで大切なのが、それぞれの視点をぶつけ合うことなんです。科学が再現性や普遍性を求めるのに対し、芸術は一回性や独自性を重視する。その異なる視点をぶつけ合うことで、異なる流れが交差する潮目のように、多様な視点が重なり合う。こ

れど、芸術家である間瀬先生と海を見
る中で、「人と海をどうつなげるか」と
いう感覚が自分の中に入ってきました。

潮目は異なる潮の流れがぶつかり合うところなのですが、このSIOMEプロジェクトも科学と芸術という、それぞれ別の流れを持ちながら、その接点でぶつかり合っています。そのぶつかり合いの中から、科学だけでも芸術だけでも生まれなかった新しい視点が生まれる。AでもBでもない、Cのようなものがにじみ出てくる。それが、このプロジェクトの面白さであり、長く続けることで育っていく価値だと考えています。

今回は、研究者と芸術家のあいだでの試みでしたが、その混ざり合いがもっと多くの人を巻き込んで、みんなで海を考えるようになったとき、何が生まれるのか。今後は、その答えを、瀬戸内海という舞台でつくっていきたいと思っています。



Photo by Nazuna Mitani
間瀬先生と共同で実施した泥のワークショップの様子



Photo by Nazuna Mitani
潮目観測の様子

たことで、新しい発見や創造が生まれるんじゃないかと思っています。

実際、私はこれまで海を風景としか見ていませんでした。どういう構図なら美しいか、という視点で海を捉えていたんです。でも科学者である中國先生と一緒に海へ出るうちに、見方が変わりました。潮目の中に集まっている漂流物の中には動物の骨も、プラスチックも、稚魚が随伴する海藻もある。それは人間と自然が一時的に可視化されている場所だと捉えるようになったんです。物質循環や人間活動の痕跡が重なり合う、ひとつの生成の場であると感じました。この視点ができたことで、「海のアッサンブラージュ」は誕生しました。

また、このプロジェクトを通じて改めて感じているのが、「問いを立てること」の重要性です。今後は瀬戸内海全域のデータを集めながら、「豊かな海とは何か」という問いに向き合っていきたいと思っています。単純に正解を出すのではなく、多様な視点から「豊かさ」そのものを問い直していく。そのことに、大きな意味があると感じています。

《海のアッサンブラージュ》2025



潮目に集まる様々なものが混在する状態を、ひとつの「生成の場」と捉えた作品。この人間が認識しづらい一瞬の現象を可視化するため、海水をそのまま採取し「凍らせる」という手法で制作された作品。